

ゴシカ(GOTHiKA)

2004(平成16)年2月29日鑑賞(道頓堀パラス)



監督=マシュー・カソビッツ/出演=ハル・ベリー/ロバート・ダウニー Jr./ベネロベ・クルス/チャールズ・S・ダットン (ワーナー・ブラザーズ映画配給/2003年アメリカ映画/97分)

……「チョコレート」(01年)でアカデミー主演女優賞を受賞したハル・ベリー主演のホラー映画。森の中にある女子刑務所の精神科病棟を舞台に繰り広げられる優秀な精神科医の主人公を襲う心霊現象。ホラー映画ながらテーマがはっきりしているため、割とまとも。そして、女優ってホントにいろいろな役を演じられるものだと妙に感心。

ゴシカ (GOTHiKA) とは？

「GOTHiKA」を辞書で引いても載っていない。しかし「GOTHIC」ならある。その意味は誰もが知っているゴシック様式のこと。しかしそれとは別に、「怪奇的題材を扱った文学」(ラーナーズ プログレッシブ英和辞典)という意味がある。そしてパンフレットには、「人気のない、もしくは人里離れた設定と気味の悪い、または暴力的な事件を用いることを特徴としたフィクションのこと」と解説している。さらに、プロダクションノートには、「ゴシック・ホラー」「ゴシック文学」について解説されている。そういうことだったのか。なるほど、やはり映画を観ることは勉強だ。しかし、『GOTHiKA』というこの映画のタイトルは、やっぱり存在しないということでもちがいないよね……？

舞台は女子刑務所の精神科病棟

「ゴシック・ホラー」の定義どおり、この映画の舞台は森の中にそびえ立つ、ウッドワード女子刑務所の精神科病棟。この映画では全体場面のほぼ9割がこの

精神病棟内だから、くり返し観ていると、この精神病棟の広さや警備の嚴重さがよくわかる。当初はセットを組むつもりだったが、ケベック州のラバルに実在したセント・ビンセント・デ・ポール（通称SVP）刑務所を発見したため、これを使ったとのこと。もっとも、その内部には相当手を加え、迷路のような廊下や階段、ペンキの剥がれた独房棟などを映画用に新たに作ったとのことだ。

主演は、あのハル・ベリー

この映画の主演は、『チョコレート』（01年）でアカデミー賞主演女優賞を受賞した黒人（系）の美人女優ハル・ベリー。彼女は『チョコレート』の後も「オスカーを取ったから今後はシリアスな映画しかやらない、なんてつもりは全然ないわ。違った映画、違った役にどんどんトライするつもりよ」と述べて、現実にも『007/ダイ・アナザー・デイ』（03年）にボンドガールとして出演した。それも通常の「飾りもの」のボンドガールではなく、アクション女優顔負けのすごいアクションを披露した。またパンフレットによると、「私だけじゃなくて、たとえばアンジェリーナ・ジョリーもそうだけれど、アクション映画の主役を務める女優が増えているのは、良い傾向だと思う。つまり、観客がそんな女性たちを見るのを望んでいるということ。女性としては、とてもポジティブな気持ちを感じるわ」とまで言っているのは立派なもの。

この映画の前半で演ずる美貌、知性が売りモノの美人精神科医ミランダ・グレイ博士は、ほとんど「地」でいけるものだが、霊にとりつかれた際の恐怖にゆがんだ精神異常者（？）を演ずる迫真の演技はさすが。まさにこの映画はハル・ベリーのためにつくったようなものと言っても過言ではないはず。『チョコレート』『007/ダイ・アナザー・デイ』『ゴシカ』に続く次作は『Catwoman』（04年全米公開予定）とのことだが、私としてはニコール・キッドマン顔負けのような美貌をいかしたセクシーな役を是非やってもらいたいものと願っている。

思わず思い出した連載小説

私が目下楽しみに読んでいる新聞の連載小説は、渡辺淳一原作の『幻覚』。昔、日経新聞に『失樂園』が連載されていた頃は、毎朝真っ先にその連載小説を読ん

でいたのと同じように、私は今、毎朝これを楽しみに読んでいます。この小説の主人公は、精神科の花塚病院を経営する若き美貌の精神科医の花塚氷見子。そしてこのストーリーを語っていく「僕」こと北向健吾は、この病院に勤務する看護師。実は、「僕」こと北向健吾は、この院長の氷見子の女医の魅力にとりつかれており、1度「寝た」ことがある。それはさておき、この映画評論を書いた2月29日は、ちょうど患者が死亡したため、遺族から裁判所に訴えられカルテの証拠保全手続がとられているところ。

私がなぜ思わずこの連載小説を思い出したのかというと、この小説でも、精神病患者に対する過度の注射と薬づけの治療が問題となっているから。実は「僕」こと北向健吾も、氷見子院長先生の、ある患者に対する薬づけ治療に疑問をもち、意見をしようとしたことがあるほど……。さて今後は、この連載小説はどのように展開していくのやら……？

この映画でも、テーマの1つが精神病患者に対する過度の注射と投薬治療。この映画での悲劇のヒロインは、女囚で精神病患者(?)のクロエ(ペネロペ・クルス)だが、クロエの訴えは、「悪魔にレイプされた!」というもの。クロエの担当医師であるミランダ博士は、もちろんこれをまともに聞かず、「幻覚」「幻聴」と診断。

自分の話(訴え)を信用してくれないことがわかると、クロエは暴れ出すため、やむなくこれを鎮めるための注射と投薬。精神病患者に対する治療はこのくり返しとなるから、治療をしているのか、それとも薬づけにして、より病状を悪化させているのか実はよくわからないというのが真相だ。まさに、読売新聞の渡辺淳一の連載小説のタイトル『幻覚』と同じ実態がこの映画でも見られるわけだ。

君は心霊現象を信じるか？

「超」能力(者)の存在や、心霊現象の実態については、テレビなどでもよく放映されている。超能力を利用して、現実には被害者や犯人を捜し当てたという番組も多い。私が秘かに評価しているのは、産経新聞で連載されている桂小米朝の『新・私的国際学』というタイトルのコラム。その2月29日(日)は「スピリチュアリズムとは」というタイトルで、相談者に守護霊からのメッセージを伝え、

前向きに生きるヒントを与えるという、今話題のスピリチュアル・カウンセラー、江原啓之氏（39）のことを紹介していた。これは非常に興味深いもの。またパンフレットには「ゴシック・ホラー」として、さまざまな作品が一覧表にまとめられている。私はもちろんこのすべてを観ているわけではないが、このように体系的にまとめられると、「ああ、あの作品はここに位置づけられるのか」、ということがよくわかり興味深くかつ便利なものだ。このように、超能力とか心霊現象というものは多分世の中にたくさん存在しているものだと私は考えているが、さて皆さんは……？

宣伝文句はちょっと貧困……？

この『ゴシカ』について新聞での宣伝文句は、『『リング』『呪怨』……そして“怨念”は、突然変異した』『アメリカ発、ウラメシヤ』』というもの。しかし私に言わせれば、この宣伝文句は全然、この映画の良さや本質を語ったものとはいえない。この映画の本質とは関係のないことばの羅列だ。もっとも、ごく短いキーワードでこの映画に興味をもってもらうためには、やむをえず過去の「共通語」を使用しなければならないことも、わからないではないが……。この映画のキーワードは、何とんでも「精神病院と注射、投薬」であり、また「精神病院を舞台とする権力、ゴッド VS. 精神病患者」そして「加害者 VS. 被害者の構造」。そしてそこから必然的(?)に生まれる「霊」と「霊」による復讐ということ。もっとも、抽象的にいくらこんな言葉を並べても、この映画を観ていない人にはわからないから、結局は誰もが興味を引くキーワードでその気を引こうとするわけだ。それはわからないでもないが、やはりそれは一種のインチキ。わかりにくくても、この映画の本質的なキーワードでこの映画の良さを紹介したいものだ。

パンフレットの解説はさすが

この映画の解説は、①岩井志麻子（作家）「美貌の恐怖」、②神無月マキナ（ライター）「世界中に存在する『ゴシカ』現象」、③鷺巣義明（映画文筆家）『『ゴシカ』は、心の迷走の果てに覚醒したヒロイン＝ミランダのドラマ!!』、④永田よしのり（文筆業）「ゴシック・ホラーの歴史と様々な作品群」の4本だが、いず

れも、それぞれの立場から自分の視点を明確に打ち出した価値のある解説。さらにラストのプロダクションノートもいい。これほどきちんと書いてくれば、600円のパンフレットはすごく安いもの。特に、この『ゴシカ』のようなわかりにくい映画は、パンフレットを読んで勉強することが大切。

脇役に徹した美人女優も立派！

「悪魔にレイプされた！」と泣き叫びながら、訴える女囚の精神病患者（？）クロエに扮するのは、何と『コレリ大尉のマンダリン』（01年）や『バニラ・スカイ』（01年）に出演した美人女優のベネロペ・クルス。当初、この精神病患者からの訴えを、「知的に」「冷静に」聞き、心理分析をしていたミランダ博士も立場が変わり、自分が治療を受ける精神病患者（？）になると、はじめて、このクロエの訴えの意味が理解できることになる。「誰も自分の言うことを信じてくれない！」「説明すればするほど精神障害だと言われる！」「信用してもらえなくて暴れると注射と投薬、挙げ句の果ては、懲罰、拘束、独房入り！」という精神病院の構造について、自分が権力者・加害者の立場から被害者の立場に立ってはじめてミランダ博士もわかるわけだ。このように女囚クロエの役は結構重要なものだが、出番は少なく、そのうえ自分の美貌をアピールできる映画でもない。しかしパンフレットによると、「出演作を決める時、自分がスクリーンに出ているシーンが全部で何分あるか、なんてことを基準に脚本を選んだりしない。だから、出演場面が少ないことなんて気にならないわ。映画の中できれいに見えないことだって平気よ。だって、それが理由で女優をやっているわけじゃないもの。今回もハルと一緒に、私たちの役は、どんなルックスであるべきなのかを考えた。その結果、躊躇することなく、口紅もつけないと決めたのよ」と述べているのは立派。もっとも、すべてが解決した後のミランダと別れるシーンに登場するベネロペはさすがに美しく、「はっ」とさせられること請け合い。それほどこの目鼻立ちのくっきりしたスペイン出身の女優は美人。ホラー映画の本筋とは関係ないが、こういう楽しみ方もスケベ親父ならではのもの……？

2004(平成16)年3月1日記